表紙, 目次, 通信, 雑報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38310

十全會雜誌

大正二年二月一日發行

第十八卷
第二號
(第八十五號)

金澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第十八卷第二號（第八十五號）目次

笹岡芳名

○原著及實驗

●葡萄狀球菌「ワクチン」療法。

○通信

●本仙太郎氏通信。●田山退一氏通信。●小俣幹翁氏通信。●竹內三次氏通信。●田川益三郎氏通信。●石川元良氏通信。●田邊鼎介氏通信。●岡田申吉氏通信。●藤卷敏太郎氏通信。●厲家福氏通信。

○校內雜報

●下平先生學位授與之賀辭。●圖書室月報。●講話部例會。●在廣島同窓會。

○叙任及辭令

●石川縣。

○人事

●足立諒氏。●吉田文平氏。●小野醇吉氏。●馬場庄江氏。●進士愛太郎。●萩原忠氏。●小俣幹翁氏。●栗本保身氏。●伊藤芳廣氏。●端谷豐吉氏。●內田秀貞氏。●篠田嘉年氏。●武內勉二氏。●吉見昌造氏。●本正生氏。●鈴木寛之助氏。●富家光雄氏。●田中儀一氏。

○會告

●校外特別會員會費調書。

最後の頁にある會費を
御閲讀ありたし

通信

●本仙太郎氏通信　（四十二年卒業。十全會宛）

謹啓御諒闇中の迎春何處も全じなから尤も取り分け猛熊吼ゆてふ蝦夷が島根は一しほ物淋しきもの之れ在り候今や街道悉く雪を以て敷かれ腕車は形を沒し往復にも橇を以て氷りつみたる道を走る處甚だ珍妙に感ぜられ候さて從來久敷御無沙汰に打ち過ぎ失禮の段何卒御海容被下度候

余が病院の模樣概略御報知仕る可く候間御笑讀被下候はゞ本懷の至に存じ奉り候

從來小樽には小樽慈惠病院とて財團法人の施療病院在り此數年前の創設にて初めは開業醫が數人更迭に出張致したるものなりしも其後母校出身江藤幹殿院長となり獨力診療に從事せられ間もなく母校出身下條殿も來られ江藤樣は外科下條樣は內科を擔當せられ相應患者も之れ在りたる由去る處一昨年現院長瀨戸國治殿赴任後全じく前二氏は全院長の下に務められしも昨年二月両氏共全時に開業せられ現に江藤樣は耳鼻咽喉科專門（小樽手宮）下條樣は內科小兒科專門（小樽稻穗町）にて相應に患者ある由に御座候然る處小生儀昨年四月の終り小樽慈惠病院に赴任仕り其後全院が藥價の事に付醫師會の反對を受けたる爲め慈惠病院現事の主立ちたるもの相計りて爰に數萬金を投じ古き病院のあきたるものありしを買ひ取り改築したるものが今余が現在居る小樽病院に御座候

病院の組織は內科部と外科部に分ち眼科は前者に余の婦人科は外科部に屬し外科醫長血清院長は瀨戸國治殿にて外に內科の醫長として醫學士加用信憲といへる人之れ在り私立小樽病院は十月半頃開院仕りたるものにて診察室は內外科眼產婦人科の四種に分かれ眼科には別に大學專科出の專門醫が居る譯けに御座候醫員は內外科各二人にて余等の別科は各々一人に御座候故に余の手術の場合には外科の醫員を賴み來る譯けに御座候病院は極小規模にて五十位を收容するだけにて段々增築することになり居り候外來は現今寒き故百五十內外之れ在り候病院の事業としては看護婦講習產婆講習をいたし居り各二十名位之れ在り場合によりては講師ともなる譯けに御座候從來慈惠病院には主任醫在つて診療を爲し小樽病院長之れを兼れ余等も面白き患者あらば便宜入院せしめらるこゝなり居り候亦醫員藥劑師にて月二回「レフエラート」會を遣り候も左程珍らしきものとてはなく只々抄讀をする迄にて原著實驗の如きものは日猶ほ淺く一つも出でざるを遺憾と存じ候外國雜誌の抄錄位は御會雜誌には面白からずと存じ候まゝ差控へ居る次第御差し支へなくば暇のあるに任せ專門的のものを書いて見たいとも存じ居り候甚だ拙なきことのみ長々書き立て申し亂筆の段何卒御許し被下度願上候（下略）

北海道小樽病院　本仙太郎

大正二年一月九日夕

●田山退一氏通信　（四十二年卒業。十全會宛）

（前略）申上ぐる程の事も之なく候へ共以下少しく近況御耳に達し度く筆染め申候初めは只家事上の都合により久しく此地に止まる考もなく有りたるまゝに小さき家屋を借りて一ヶ先づ開業致し候に最早や既に滿二ヶ年を經過仕り候其間種々の社會の荒波にも遇ひ從て色々の感想も浮び申候無經驗に因する困難に相遇する時モット豪らい醫者であり度く希ひ研學弛みなき

學府懷かしき事と屢〻に御座候又斯く世帶を持ちて心淋しく感じ候は舊友の一人〳〵次第に失はれ行く事に之あり候書信の往復も稀れとなり之あるも只單に時候の挨拶位に止まり次では僅かに年賀狀によりて其存在を知るばかりとなり遂に行衛不明ともなり十全誌上にも不明となるさへ之あり候多忙なるが故にや御座候はん又一方には小生が「ノイラステニー」眼を以て觀察致す爲めかは存じ申さず候へ共同業者の交情は暖かなる能はず皆な各〻天狗然として鼻の突き合はせを致し居る有樣意氣や可ならんかなれ共力弱き小生などは甚だ殺風景にて只一人友もなく「オアシス」なき砂漠を行くかの感之あり候

我吉田郡内に開業せる母校出身者は小生の開業當時には五名に候ひしが昨年中婦人科にありし吉田圓磨氏か東藤島村に、福井病院外科に在りし春日健治氏が小生と九頭龍川を隔てゝ河合村に各〻割據致し茲に同勢七人と相成り申候即ち右二氏及小生の他には森田村に古く富田繁氏あり岡保村に宮越常次郎氏松岡村に中條俊夫氏、郡の東端上志比村に山田外來雄氏之あり候、郡の小なるにより同業者も少なく總數十九名に之あり從て醫師會なども餘り活氣之なく候小生等田舍にありて「ライツ」を受くる事もなく淋しく候まゝ此同窓七人相集りて一會合を設け交情の道を爲さんと目下計劃中に之あり候

福井市に於ける同窓生は未だ比較的少數にて開業者は僅かに十一名ばかりかと存じ候富田氏は敦賀氏の内科、直氏の泌尿生殖器科を以て益〻盛に病室の增築などあり一方には三崎吉太郎氏胃腸病を以て信用を博し、昨秋は奥田秀的氏外科を以て開業致し候縣病院には中原氏、河[illegible]病院には加勢氏奉職、最近坂井郡芦原溫泉所には谷川瀰氏現はれ申候母校出身者も追々其數を增加致し候は心强き事に御座候へ共唯一つの恨事一[illegible]結するに難きかの觀之あり候尤も縣下一般の官立醫專校友會なるものに數年前より設けられ春秋二回の會合を催し交情研學の機關となし居り開會地は福井武生鯖江三國等となし皆な遠きも厭はず精々出席は致し候但し中には凡て會合には一切顏を出さゞる方針を取り居れるが如く見ゆる同窓生も之あり候

田舍醫者として一生を終らんは誠に殘念なる心地致し常に胸中何物かを求めつゝ之あり候然し乍ら年齡を重ぬるに從ひ斯かる考は只若きものゝ迷なり世を益するに足らざる勉强などは一切道樂に過ぎず、自分の腦力財力にも相談し用の無い獨乙語なども忘れて仕まひ難かしい事は一切拔きにして身体を保養し長命をはかり少しでも多く財を貯へ子孫の繁榮を期するが肝要にて其爲めには雜誌なども一種位で澤山それも三共のロハで吳れる治療藥報の如きものでも時に見ればよい會合などにも出る事はいらない遠き舊友などは如何なつても關係なし只近隣の百姓や村の有志と云ふ樣な者を相手にし太平樂に日を送るべきなりと云ふ思想に傾きは致さぬかと思はれ申候

斯かる考の爲めにも之なく候へ共如何に心が急つても目下の處此地を去つてどうするなどは絕對不可能の事と悟り當地も田舍としては人並みに働かせる地方と見込みを附け申候により窮屈なる借屋にも困り果て候まゝ半永住の爲め昨秋來一棟新築仕り今月には引き移りの心算に御座候

結婚も人生の一行事擧子も同じく一行事、昨年一男兒を擧げ申候が之が日々に發育し智識を增すを見て此子に追ひかけらるゝ樣な感じ致し只何となく不安にて斯くしては居られぬ樣な氣に相成り申候

改元の新春、新築の家に入りて何とか新らしき生活に入り度きものと思案致し候

甚だ詰らぬ事のみ申上げ恐れ入り申候(下略)

福井縣吉田郡西藤島村地藏堂　田山退一

大正二年一月六日

●小俣幹翁氏通信　（四十三年通信。十全會宛）

謹啓過日御貿れの母校出身者にして海軍々醫になり居る人々の氏名及現勤務場所を只今御報申上候尤も之れは現役のみに候間他に豫備になり居らるる人々のある事を御承知置き被下度候

1　鈴木寛之助（中監）　獨國駐在の爲め渡歐中　（二十九年）
2　寺本義一（少監）　舞鶴軍港々務部軍醫長　（三十年）
3　中野才幸（少監）　德島海軍練炭製造所軍醫長（三十一年）
4　大西瀨治（少監）　佐世保軍港軍艦盤手軍醫長（三十二年）
5　伊藤顯德（大軍醫）　馬公要港部附
6　長井運男（大軍醫）　吳軍港軍艦千代田軍醫長　（三十八年）
7　小出貞次郎（大軍醫）　舞鶴海軍病院附　（三十九年）
8　小野醇吉（大軍醫）　舞鶴軍港軍艦千早軍醫長　（四十年）
9　萩野茂次郎（中軍醫）　横須賀海軍砲術學校附　（四十一年）
10　大正一年度卒業者の中に有之候也小生未だ承知致居らず候

以上の他に小生の調べ漏れも可有之候へども小生の調べ得たる丈けを御報申上げたる次第に御座候（下略）

舞鶴軍港軍艦千歲乘組少軍醫　小俣幹翁

大正二年一月十六日

●竹内三次氏通信　（四十四年卒業。松原教授宛）

（前略）得意然と近況申上ぐる程の事も御座無く當地方は所謂舊醫なるもの次第に跡を絶ち大部分は醫專學校出身及內務省受驗及第者にて各〻專門を標榜して嚴めしき構ひの競爭振り中々の骨に御座候之の一大競爭暗潮流中全力を鼓して喘々として游泳罷在候

學窓時代先生の下に精神病學の講義を非常なる熱心と興味を以て聽講致せし折にはまさかに如斯く無氣力になかりしものを只今の汲々患客の數の其れ多からんをのみ望むが如き念恐へき惰性の固着致したるに顧みて慄然たるもの有之候

然れども醫學雜誌等に記載さるゝ斯界諸明星の學論說戰に火花を散らさるゝを鬪讀致し折奮然と精性を踏破す先生の下に走らんと焦心罷在候入善町（余の開業地）より南へ一里にして新屋村あり戶數附近村落を加へて五六百戶の地に明治四十二年？卒業生の永井清次君有之候又東へ半里春日村に玉森法靈君有之候共に門前市を成すの盛況にて少壯「ドクトル」永井玉森の名附近鄕のバウエルに喧傳著しく候

何れ今月中醫師會開催（例年）仕り兩君會合の際。先生より言葉を傳へて自ら御兩君の近況を御周知仕る樣取計る可く候

時下酷寒御鳳身御自愛遊され度候終りに際し亂筆厚謝仕候早々敬具

一月九日　富山縣下新川郡入善寺町　竹內三次

●田川益三郎氏通信　（四十四年卒業。十全會宛）

（前略）實は小生も卒業後再び研究に出掛ける積りにて歸國仕候得共旣に兩親は古稀に達し居り一先安心致させ度存候爲みも遺憾本懷を得ず今日は兩親の命に由り田舍開業仕候開業當時は直角的に診斷學を患者にあてはめんと苦心致し候も其調子に參らず其都度母校在學中の事を思出し學生中の呑氣に打過したるを今更の樣に感じ入申候其上に暫時は方言の「せん」とか「しやく」とか寸白とか實に其不可解に苦しみ申候小生にては一般に「アスカリス、アンキロ」比較的多數に見受け申候幸ひ此頃の柚の赤らむ時に候得ば間暇を得て統計を取りたき積りに候其他「ヒステリ」、「ノイラステニ

「」の患者は時々見受けられ候若輩の吾々殆んど診斷に苦しみ申候小生の縣下に於ては母校出身者極めて少數に有之他校出身殊に名古屋、京都、大阪、岡山が多數に御座候只小生の同郡にては寶島愃太郎氏（甲種醫學校時代の出身目下陸軍二等軍醫）あり時々醫會に出合ひ申候森轍郎氏（四十三年度卒業）は養父と共に盛大にやられ居候齋藤祐男氏（四十四年卒業）は目下縣下宇治山田市赤十字社病院に勤務致され候同氏は中々研究熱心にやられ居り候其他紀州本の本に西正胤君（三十九年卒業）あり阿藝郡椋本村とかに高崎君（何年度の人か遠方故承知仕らず候）あり岩間定雄君（四十四年卒業）は鄉里鈴鹿郡龜山町に開業致され居候未だ母校出身が一度も會合せし事無之甚だ遺憾に存居候其會合の手初め致度考に有之候目下田舍醫師の収穫時に際し多忙の餘り思出し候まゝ亂筆を致し申候

終に臨み先生の健康を祈り母校の爲め御盡力の程を希望仕候草々頓首

三重縣一志郡八幡村　田川益三郎

大正二年一月十一日

●石川元良氏通信（四十四年卒業。十全會宛）

（前略）先生始め先輩諸氏各位益々御發展の趣き奉賀上候降て迂生卒業と同時に大阪胃腸病院（院長湯川玄洋）に就職し昨年八月末日まで胃腸病を研究仕候處辭職仕り現今にては左記の所に於て專ら胃腸病と小兒科病との診療に從事仕居候故何卒御休心可被下候貴雜誌を始め凡て雜誌を閲覽仕候に學理的の事のみ記載し有之實用的否な誰にても行うことを得る事の記載少きは迂生開業醫の困難する所にて有之候然し將來に於ては先輩諸氏の御援助を乞ひ實地研究する設備をなさんと存じ居候先は右新年御伺ひかたゝ御無沙汰を謝し併て身の異動を御報知申上候早々敬具

大阪府西成郡傳法町北四丁目百二十六番地

●田邊鼎介氏通信（大正元年卒業。十全會宛）

（前略）扨て愚生通勤致居候日野病院は明治三十六年度母校出身者「ドクトル。メヂチーネ」日野信次氏の經營にかゝり創立後二ヶ月半の短時日を經過致候のみに候へは從つて設備等未た完全の域に達せす候病院には外科內科產婦人科耳鼻咽喉科花柳病科の六科有之院長は外科專攻相成候醫員は五名にて目下獨逸に留學中の者一名有之候病室は十二室に候昨冬は全部滿員にて申々多忙を極め申候去六日には「テタヌス」患者一名入院致候も二日間を經て死亡致實に殘念に存候看護婦は約十名に候病院に來る外來患者は主として外科患者にて殊に癲疾及橫痃の多きには一驚を喫し候を「オベラチヨン」は晝夜を問はす重症患者には施行致候も主として午後に行ひ申候勿論醫員全部總がゝりに候本院にては研究より寧ろ開業術見學に適する樣思はれ候同期卒業生中山川匡男、米元両兄は神田駿河臺病院に御研究中に候山川君は內科米元君は外科專攻に候笠島君は下谷區高松病院に內科小兒科御研究中に候其他藤巻、竹越、渥美諸兄も御研學中に候も未た再會の機を得す候六田兄は順天堂赤坂分院に於て外科專攻相成候先輩河崎正雄兄は神田區東洋內科醫院に御在勤に候上京以來日も淺く候へは諸兄御動靜を不詳追而御報不申上候（下略）

東京市下谷區龍泉寺町日野病院內　田邊鼎介

一月十日

●岡田申吉氏通信（大正元年卒業。十全會宛）

（前略）扨て當病院は最初郡民よりの寄附等により成りしもの樣に御座候

へば市内の人々よりも主に郡部の患者多く去る一日より本日に至る迄新患百三十人餘り有之候本院は院長一名醫員二名（小生と共に）藥局には二名の藥劑員事務員一名（郡役所吏員）有之別段分科的には無之院長醫員は凡ての疾病を處置することゝ相成居り候外科手術の如きも患者さへあれば午後より開始致し尚開腹術場（防腐手術室）も有之年に三四回は行はるゝ由に御座候病室は三十餘有之南北に分ち南は上等室北は下等室にて上等室の如きは御地神經科の如き床間づき且次の間付きの仲々のものに御座候入院患者は只今は正月の事に御座候へば僅少と相成十五人しか無之小生來院當時は全部滿員にて唯隔離室のみの有樣に御座候へき、患者中の疾病の主なるものは慢性腎臓炎にて浮腫を來し種々の利尿藥例へば商陸、醋剝、沃剝、硝剝、ヂギタリス、ヂウレチンのみならず牛乳療法も致候二回の穿刺もなしゝも更に効なく何を試むる事能はざるもの有之候又、梅毒性胸鎖乳頭筋肥大、膽石疝痛両側胸下腹。大腿に發生したる筋炎、肺結核を合併せる糖尿病患者も有之候

右の内胸鎖乳頭筋肥大のものには直ちに手術的療法を試み候も其後化膿を來し候初め驅梅療法をなして其經過を見たかりしも思ふにまかせず、唯今は「アヅロール」の臀筋注射をなし居候膽石仙痛の如きは一日二三回發作を來し其の注射をなし候も本日昨日は「カル、ス泉」服用の爲めか或は熱罨法の爲めか發作起らざる樣に御座候

尚最も興味深く感じ候ものは両側四肢の末端對側的に電擊樣疼痛發作的に起り暗紫色の腫脹且つ振顫を供へ入院當時は患部を水中に浸し居り其後服藥の爲めか水中に入るゝだけは宜敷相成只なげ出しの有樣に御座候へき是れ正しく「エレトロメラルギー」と思ひ詳しく調査せんとせしも正月も來り候爲めか將た又長びく爲めか遂に退院致し候此の事は何れ十全會雜誌に申上げんと存じ居り候「エレトロメラルギー」の少き事は當病院看護婦等は八年間も見ざる疾病なりと申し居るにても珍らしく思はれ候終りに小生の事は只今病院當直室の一隅にて夜となく晝となく鼠の番を致し居り唯碌々として過し居り候尚當病院は町の中央にありて後には幽邃閑雅なる縣社江沼神社ありて前田子別邸の一部とか、大聖寺名物の一つに御座候直ぐ向には鐘樓ありて毎時時を報じ昔の名殘りを止め居り候尚又此北陸道縣下有名の溫泉に近き處有之山代に一里山中には近く片山津に二里又那谷寺にも近く有之候へば何時にても御案内仕るべく候

先は小生の近況御高聞に達したく拙筆を以て申上度如斯に御座候時節柄御玉体御大切に遊され度特に御禱り申上候草々頓首

石川縣大聖寺町郡立江沼病院内

一月七日　岡田申吉

●藤卷敏太郎氏通信

（大正元年卒業）福里次吉氏宛）

（前略）僕は一週間前程から大學の分科の大塚の養育院へ通つてゐる、午前丈だから三時間は知らぬうちにすぎる、どうも東京は天氣はよいが風は寒いれ、近頃東京では「ライツンゲスアネステジー」が大いに流行してる、非常によい方法で「アンプタチオン」までもこれでやつて居る、其他「クライネオペラチオン」は皆この方法でやつてゐる、養育院は市の經營で貧民を入れ行旅病者を入れるのだから材料は多いか代りに申々きたない、が思ふ通りにやれる、X光線は毎日やつてゐる、今度は日曜毎午後から大學の近藤先生がやつて來て「ルンゲンテーベー」の「オペラチオン」を試驗的にやるとの話だ、卒業後一ヶ月を經たが何も覺ゑない、先に忘れる一方だ、其内に今院長から言ひつかつてある「アルバイト」をやりおほせたら報告しやう

（略）―大正元一二一三―

●厲家福氏通信（四十一年卒業。山碕教授宛）

拜啓嚴寒の節定めし御清康の段奉慶賀御座候迴顧すれば大阪醫學大會開會時分で先生と拜別以後殆んど三年間に打過ぎ御座候駒光如駛人をして不堪感候小生今歳秋頃是非一度日本に漫遊し諸先生及先輩諸君御機嫌御伺可申上筈の處愛憎公私事件に取紛れ終に見合に相成候は殘念の至御座候何卒御容赦可被下候尚一同樣へも斯旨を御傳可祈候さて小生今年七月頃より軍醫科長を辭して專心第六師團陸軍衛戍病院長として奉職に罷在候とも實に千餘年漢方醫を信仰せる我國には小生等の日新醫學輸入に對しては頗る骨折りに感じ居り御座候幸に目下小生等立脚點内にかなり信用を得たるとは先生の所賜にして聊か先生の臺前に告慰し得可き事に候塊に湯爾和君は北京教育部直轄醫專校に轉任し韓清泉君は浙江省醫專校長を奉職し居り此段就てに御指導し片旁御年始の愛拶迄御座候

陽曆臘月除夕

山碕我師　青釜　　弟子　厲家福謹具

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

校内雜報

●下平先生學位授與之賀辭

月黑くして雲映ぜず、悲愁徒らに深かりし年も隙駒とや昔言ひけん過客と逝きて、今大正の新年を迎ふ、日色燦として万物皆精氣に發して清き時、恩師下平先生學位授與の賀詞を捧ぐるの榮期に際會す。

世は過ぐる龍駕の元宮に俎登ましまして、諒闇の春陽にあるも、空しき哀慕にふけり心を新たにするを忘るべきの時にあらずして、今や明治を享けて正しくも國光益々宇大に照し、揮然として世界の邊土に及さんとするの機にあり、詢に以て洋々の新意義に溢漲するの時たり。

先生刀を載せて學海に乘せらる已に　有餘年極より極に、常次舵手たり、羅針となり、風雨怒濤を衝いて今や春風紅香むもむろに通ひ來り松聲祝壽を述べん彼岸に芽出度き榮冠を求め得られたり。

是れを斯界に觀し、是れを我校にとり、是れを子弟に考へ、同慶欣嘉喜悅限りなし、まことや此の新紀元を畫して立たんとする生等が仰ぐべき色旗とや見ん。

思へ志を立つる必ず標的あり、本立つて初めて道生し、遂に志を成すと云へる古言を。

聞く禾稼の成るや地中尚九里を行くに水を以てするが故なりとかや、先生の學風德容今日あるの所以亦成るの日に成れるものにあらざるは揚げて卷頭に盡せり、故に再ひ之れを爲さず却つて傷けんを恐るればなり。

今や東西の機運は融然として此の新天地に充ち滿てり是時是機、吾人は只誠の趣く處之れを本となし、勤勞德操以て主体となり、智能以て用となし、累月積歳、勉め以て新たなる照代奎運の隆昌計り、一念報國を期すると共に益々先生の意に添ひ奉らん事を誓ふのみ。

近く新舊相計つて祝賀を設くと云ふ希くは協贊一致以盛大を見ん事を言辭多くを盡さず單詞意を述べ謹而祝賀に代ふ。（中村芳雄）

●圖書室月報（二）

白山峰頂雪皚く、意氣雲を衝いて稜々たり、曩に再改完備の緒に就ける圖書室は、經營更に勉めつゝ今や設備大いに見るべきものありて遂に其の姝をなせり、而かも大方諸先輩の圖書寄送益々多きを加へ漸やく創設當時の素志に添はんとするに至れり、斯くの如きは不識の間、後學の盡益に與つて力あるや疑ふ可からず、然れ共本事業の振不振は一に會友諸氏の努力と利用に待つ所多く、從つて將來我校名の消長を荷つて立てる諸子と多大の默契あるを信せずんばあらず、希くば尙先輩諸氏の御協贊と會友諸君の奮勵を祈らんのみ、本月の寄送芳名并に書目次の如し、謹而御厚意を陳謝す。

書名	冊數	貴名
一、日本皮膚病圖譜（一、二、三、四、五、八、九、十秩）	八	下平用彩殿
一、人体解剖學第二卷	一	石川喜直殿
一、局所解剖學第一卷	一	仝　上
一、近世耳鼻咽喉科學全	二	岩田一殿
一、人體畸形矯正學	一	松岡道治殿
一、骨及ビ關節ノ結核	一	仝　上
一、先天性股關節脱臼及ビ其跛行療法	一	仝　上

●講話部例會（十二月十四日）

朝からかゝつてやつと會場の整備を終へて開會時間の午後一時記者は會場へ來た美しい莊嚴な新築大講堂の段上には「テーブル」や其上に置かれた「コップ」水瓶などが淋しそうに會員や辯士諸兄を待つて居た然も會場にはまだ人影だに見へなかつた開會時間に遲るゝ事四十分會員諸兄尙僅に十名内外に過ぎなかつた「タイムイズマーネ」である、「タイムイズノーレーザ」である、空しく待つては居られない、止むを得ず。

部長　藏光先生

の開會の辭によつて會は開かれた。

松江常行氏

諸辯士の有益な話を少數の會員のみで聞くのは惜しい會員の揃ふまで壁を相手に僕がやると云つて段上に立つた氏は醫師と人格を論ぜられた、……

……と云ふ記者が其人である惡口云はぬのも道理千萬先づ自己の批評を御免蒙り早速次の辯士

宮森基重氏

を論じよう此頃會員諸兄は、もう百名内外に達して居られた、吾人の覺悟と題して言を死程恐るべく且悲しい物はないと云ふに起し吾人は大なる抱負と大なる覺悟なかるべからずと論決された、君は新進の辯士、然も語調議論共に吾人の敬服する所希くは一層努力我部の爲に盡されむ事を喝采の音靜まらぬ内再び喝采に迎へられて段上に現れたのは

布瀨七一郎氏

である、最近遺傳學說の概括と題して話された内容の充ちた實のある話であつた吾人は其によつて少なからず利益を得た、尙落ちついた悠々迫らざる君の態度は一見段上に慣れた人を想像させる、吾部は君に望む所多大である乞ふ自重一番我部の發展に盡されむ事を「急霰の如き」喝采は君を送り更に

石川義助氏

を迎へた、五分鐘的擴擾と題して支那語で演べられた滔々水の流るゝ如くさながら淸國人の其の樣であつた後で記者の樣な「カンニツトヘルスタン」黨の爲に邦語に譯して支那語研究會の發展を熱望された拍手喝采の内に辯士は代つて

鶴崎來正雄氏

腹膜縫合と移殖に就て演べられた其研究の深く精密なる確に將來の大外科學者である自重せよ君　佐崎伊久氏

鼠咬症の一例に就て吾々後進の爲に有益なる報告演舌をされた　眞下信一郎氏

圓滿な顏に微笑を浮べて諸君！とさけばれた時誰でも「チャーム」されたゞろう。

新人たらむ事を望むと題し新人なる者の定義より說き起し大に吾人に切望されたのである吾人は吾部に君の如き辯士あるを大に誇りとすると同時に君の責任亦重大である　脇坂先生

「エマナチョン」に就て吾々學生の爲に有益な講話をされた。　下平先生

黑白判ぜざる頃先生は段に立たれて我講話部の發展を切望された吾人は奮勵努力以て先生の意に報いればならぬ。

斯くして　田中吉左衛門氏　村山良平氏

の二辯士を餘すに太陽は遠慮なく西海に沈み行く部長の閉會の辭により散會したのは五時半であつた。（松江記）

●在廣島同窓會（十一月六日）

舊臘十一月六日午後六時より在廣島なる同會は、同市鳥屋町溝口に於て開催せられ、吉田幹事の挨拶に始り宴に移り會員の謠曲仕舞等ありて各自歡を盡して甚だ盛大を極めたりと當日の出席者左の如し。

篠尾明齊、吉田幡誠、淺野駒太郎、松浦啓三、吉田繁次郎、（以上陸軍）堀大次郎、宮島卯吉、（以上廣島病院）橋本安吉（水道事務所）藤田庄兵衛（縣會議員）今井亥三松、鎭紫季雄（以上開業）

叙任及辭令

●石川縣

十月二十八日附
依願醫員ヲ免ス　（眼科）　小島隆義（四四）

十月三十一日附
依願醫員ヲ免ス　（外科一部）　小原隼三（四四）
醫員拜命（十二級俸給與）（眼科）　牧田泰（四二）

十一月十九日附
醫員拜命（十二級俸給與）（外科一部）　古屋榮治（四〇）

十二月十七日附
依願職務ヲ免ス　萩原忠（四四）

一月十三日附
外科第一部長兼皮膚及花柳病科部長　下平用彩
兼務ヲ解ク
金澤醫學專門學校教授　土肥章司
金澤病院皮膚及花柳病科部長囑託（年手當六百圓）

一月十四日附
醫員拜命（十二級俸給與）（皮膚及花柳病科）　小原隼三（四四）
醫員拜命（十二級俸給與）（神經科）　喜多禎次（大元）
依願醫員ヲ免ス　馬場庄江（四三）
一月十七日附
醫員拜命（十二級俸給與）（眼科）　源明藤吉（大元）

入事

●足立諒氏　三十九年本校卒業以來市内彦三町金城療病院に入り藤井伊之吉氏の下に外科を專攻し首席醫員として精勵恪勤久しく敏腕を振はれつゝありしが、不幸二竪の冒す處となり一昨秋來休養せしも病勢依然として消長常ならざるを以て、其父君の昨六月長逝せらるゝを待ち自ら職を辭して故郷に療養すべく七月歸郷せられたり、而も終に復起つ能はず、霜葉二月の花よりも紅なる十一月六日郷里若州小濱に於て溘焉として易簀せらる、思へば前途更に活舞臺に立つて活人刀を振ふべく多大の宿志を懷きながら空しく白雲一片の煙となる、同君千秋の遺憾さこそ偲ばれて只々袖の濡ふるを覺ゆ、悲哉、謹て吊す。

●吉田文平氏　（四十年度卒業）は今回和歌山縣西牟婁郡田邊町字上屋敷三十二番地に於て皮梅科專門にて開業せられたり。

●小野醇吉氏　（四十年度卒業）は今回舞鶴軍港軍艦千早附に轉任せられたり。

●馬場庄江氏　（四十三年度卒業）は卒業以來金澤病院眼科部に勤務中なりしが今回安東縣病院眼科主任として聘せられ昨一月下旬赴任さる出發にさきたち一月十八日金谷館にて盛なる送別會ありて氏の行を盛にせり。

●進士愛太郎氏　四十三年卒業後金城療病院に入り專ら外科を修め傍ら内科にありしが、舊臘末辭職、本月中旬より縣下石川郡鞍月村字南新保に於て開業せらるゝ都合なり。

●萩原忠氏　（四十四年度卒業）は舊臘神經科醫員を辭し海軍少軍醫に任せられ東京海軍々醫學校乙種學生として入學されたり。

●小俣幹翁氏　（四十四年度卒業）は同しく舞鶴軍港軍艦千歳附に轉任せられたり。

●栗本保身氏　藤井伊之吉氏令室の同胞たる君には、四十四年卒業以來金城療病院外科部に在りしが、今回傳染病研究所講習生として入所すべく東上せられたり。

●伊藤芳廣氏　（大正元年度卒業）卒業後眼科部に研究中なりしが昨月東上尚一層斯學を研究さるゝと。

●端谷豐吉氏　（大正元年度卒業）は眼科部に研究中なりしが今回越後長岡病院醫員として招聘せられ昨月中旬赴任されたり。

●内田秀貞氏　新卒業の學士、金城療病院醫員就任。

●篠田嘉年氏　仝　上

●武内勉二氏　仝　上

●吉見昌造氏　仝　上

●本正生氏　（大正元年度卒業）は在學中よりかれて大望を抱きて此一小孤島内に齷齪するを潔とせず將來は海外に轉住して國勢の發展に資せんとするの念慮沸騰して止まず爲めに卒業後は暫く金澤病院神經科にありて内科一般を研究中なりしが愈々海外旅行免狀を得て去一月二十九日讃岐丸にて横濱灣頭を辭し怒濤を蹴て遠く北米の天地に向はれたり

全氏は最初北米西岸のシヤトル市に上陸し次てポートランドに立寄りてサンフランシスコ市に落附き同市に於て海外の開業に必要なる醫學全般を更に深く研究し且つ海外の發展に最も緊要なる英語を修得し幾年の後ち業成るに及びて更に他の南洋諸島の如き異域に轉じて益々發展せんとする大希望なりと云ふ當今青年人志の意氣沮喪して僅かに故郷に安逸を貪り小成に安んじて多少の蓄財を理想として終に醒生夢死する者滔々として多くは是れ然りと云ふの時に當り血族の愛を去り同朋の情を捨てゝ只管國家の發展の爲めに海外に突進せんとする全氏の意氣旺盛は正さに青年醫士の範とすべき所なり氏や志想最も堅固にして身体最も强健なり人格高くして希望遠く其成效を見んこと期して待つべし。切に全氏の自愛と成効とを祈る。

●鈴木寛之助氏　（二十九年度卒業）（海軍々醫中監）はさきに英國皇帝陛下戴冠式に參列され歸國後舞鶴軍港海軍兵廠附なりしが今回獨乙伯林に留學を命ぜられ腹部内臟外科を研究せらると云ふ全氏の吾校在學中に於ける名聲と海軍部内に於ける信用とは万人の認むる所なり斯る前途最も有望なる同氏が正に世界學海の中樞に移りて更に其學殖を進めんとす歸朝後の活動一層絶大なるものあらん。

●富家光雄氏　（四十二年度卒業）陸軍三等軍醫（豐橋）

●田中儀一氏　（四十二年度藥學卒業）陸軍三等藥劑官（金澤）

二氏は昨冬陸軍々醫學校を卒業せられ成蹟優等により恩賜の時計を拜領せられたり、曩きには伊藤哲一氏（四十一年度卒業）あり次て北川文松氏（四十三年度卒業）あり共に首席を以て各陸軍々醫學校を卒業して恩賜の時計を拜受し殆んど毎回我校出身者の頭上に月桂冠を裝飾して吾校の名聲を博せしに今又両氏の名譽によりて吾校醫學科及藥學科のため絶大の名譽を獲られたるは吾人の大に愉快とする所なり

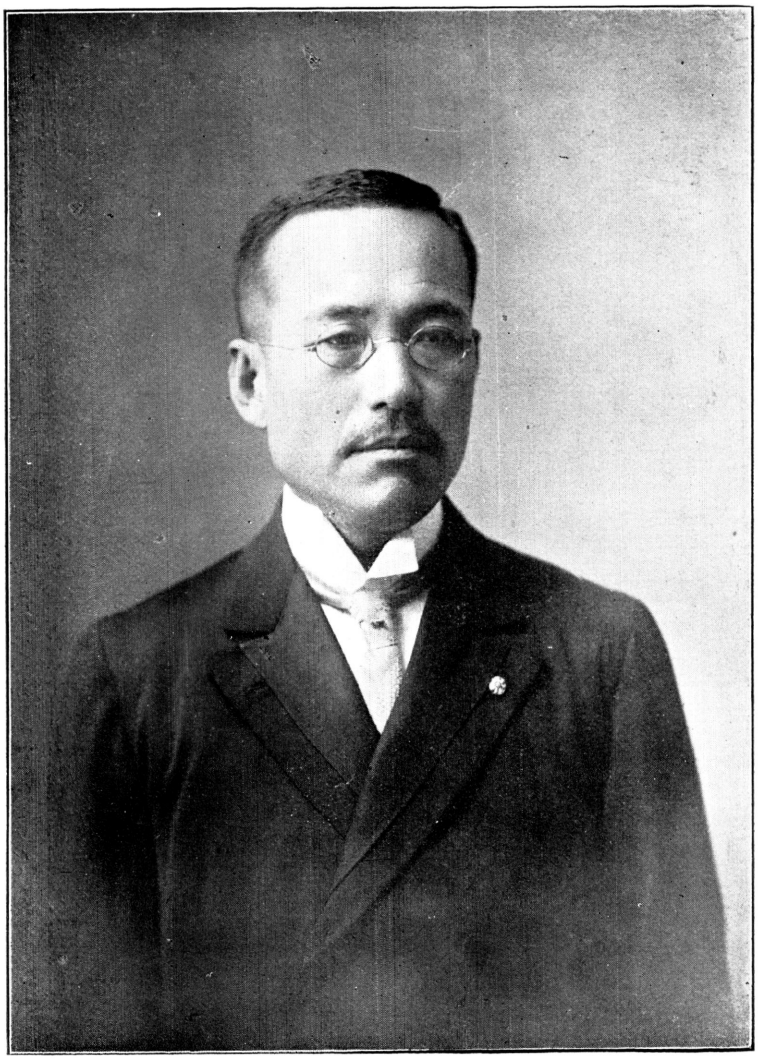
會告

●自大正元年十二月十一日至大正二年一月二十一日校外特別會員會費調書

金額	期限	氏名
金參圓	自大正元年度至大正三年度三ヶ年分	北村清太郎君
金參圓	仝	本正生君
金參圓	仝	藤澤好彦君
金參圓	仝	武田良海君
金貳圓	自大正元年度至大正二年度二ヶ年分	眞柄佐一郎君
金參圓	自大正元年度至大正三年度三ヶ年分	根布貞吉君
金參圓	仝	武長壽雄君
金壹圓	大正元年度分	加藤慶三君
金參圓	自大正二年度至大正四年度三ヶ年分	吉江桑太郎君
金參圓	自四十三年度至大正元年度三ヶ年分	島田義一君
金壹圓	大正元年度分	村松貞治君
金壹圓	仝	國分金城君
金壹圓	仝	池田耕君
金壹圓	仝	武田正壽君
金參圓	自大正元年度至大正三年度三ヶ年分	萩原忠君
金參圓	仝	馬場庄江君

會告

本會々員にして會費未納の方少數有之候へ共思ふに之は各位が平素業務多忙にして餘暇なきと或は計らず失念せられ或は郵便局の遠隔せるためとに因ることゝ確信せられ候。依りて本會は本年度迄の會費未納の各位の御便宜を謀り今二月中旬集金郵便法によりて會費を徴收仕度考に候さすれば之によりて諸氏は居ながら各自宅に於て會費を納附せらるゝの便宜有之候こと故左樣御承知下され度候尚ほ豫め此事を御家族にも御傳へ置かれ度願上候さすれば御留守中に郵便脚夫が會費徴收に參り候ても不都合なきことゝ存候



醫學博士　下平教授

下平博士略歷

文久三年五月和歌山縣東牟婁郡新宮町ニ生ル。
三十九年中石川縣ヘ轉籍ス。
明治十二年十一月東京大學醫學部豫科ニ入學。
十七年十二月東京大學醫學部ニ入學。
二十三年七月東京帝國大學醫科大學醫學科卒業證書授與セラル。
同年同月東京醫科大學助手ヲ命ゼラレ外科部ニ勤務申付ラル。
同年十二月內務省ヨリ醫術開業免狀ヲ授與セラレ醫籍ニ登錄セラル。
二十四年五月山梨縣立病院長ヲ申付ラル。
二十六年六月日本赤十字社山梨縣委員部委員ヲ囑托セラル。
二十九年七月日本赤十字社山梨支部幹事ヲ囑托セラル。
同年八月山梨縣市町村立小學教員恩給顧問醫ヲ命ゼラル。
三十年一月甲府市區改正調査委員ヲ命ゼラル。
三十年八月山梨縣臨時檢疫部檢疫官ヲ命ゼラル。
同年九月依願山梨縣立病院長ヲ免ゼラル。
同年十月第四高等學校教授ニ任ゼラレ高等官六等ニ叙セラル。
同年同月石川縣金澤病院外科々長ヲ囑托セラル。
同年同月石川縣金澤病院皮膚病梅毒科長兼務ヲ囑托セラル。
同年十一月正七位ニ叙セラル。
三十二年十二月石川縣金澤病院外科第二部長ヲ囑托セラル。
三十三年一月高等官五等ニ陞叙セラル。
同年三月從六位ニ叙セラル。
三十六年一月高等官四等ニ陞叙セラル。
同年二月日本赤十字社篤志看護婦人會石川支部講師ヲ囑托セラル。
同年四月正六位ニ叙セラル。
三十八年十月日本赤十字社特別社員ニ推薦セラル。
同年十二月高等官三等ニ叙セラル。
三十九年二月從五位ニ叙セラル。
同年四月勳六等ニ叙セラル。
同年八月外科學及皮膚花柳病學研究ノタメ滿二ヶ年獨乙及瑞西國ヘ留學ヲ命ゼラル。
四十三年六月勳五等ニ陞叙セラル。
同年十月獨乙及瑞西國留學ヲ了テ歸朝ス。
同年十一月石川縣立金澤病院外科第一部長兼皮膚花柳病科部長ヲ囑托セラル。
大正元年十二月論文ヲ提出シ醫學博士ノ學位ヲ授與セラル。
大正二年一月石川縣立金澤病院皮膚花柳病科部長兼務囑托ヲ解カル。